

# バリアフリーの教会を目指して

キリストを模範に教会の形を整える

山元 眞

信徒数約五〇〇人の教会、園児数一六〇人の幼稚園、約二五〇人の巡回教会（司祭が常駐しない）を担当して三年目に入った。福岡、佐賀、熊本県にまたがるカトリック福岡司教区に所属。司祭になって二十五年目を歩み始めた一牧者として、日ごろ考えていることを分かち合いたい。

## 1 教会の現状

カトリックの司祭は、一般に教区の司教から任命されて教会に赴任する。教会共同体から求められて、牧職につくわけではない。赴任先での任期も決められていない。そのような状況で、まずしなければならぬことは、赴任先の教会をよく見て、ありのままを受け止めることである。まず、現教会

に赴任した当初に見て感じたことを、思いつくままに書いてみたい。あくまで、自分が感じたこと。

主日のミサ参加者がそれほど多くない。ミサが終わると、残って談笑することもなく、参加者は、それぞれ帰途につく。ミサには義務感で参加している信者が多いようだ。ミサ中は静かなのだが、なんとなく生き生きとした雰囲気がない。典礼の奉仕をする人たちも決まっている。子ども、若者たちが少ない。教会の運営に関しては、司祭と教会委員が中心で、実際に活動するのも、委員たち。教会の諸活動に参加する人たちも、だいたい決まっている。活動は内向きで、外に向かって開かれてはいない。教会内外の掲示板の情報も少なく、初めて教会を訪れる人のことは、あまり考慮していない。

ないない尽くして、暗く、否定的なことばかりを並べたようだが、誰を責めるでもなく、ありのままを認識することから司牧が始まる。

## 2 教会をどのように考えるか

先の現状を見て、教会とはそのようなもので別に問題は無い、と考える向きもある。司祭同士で語る時も、信徒と語る時も、教会をどのようにとらえているかで、目指す教会像に大きな違いがでてくる。信者の生活で大切なのは祈りをすることであって、神とのかかわりを大切にしていけば、それでいい、とりたてて活動をする必要もない、と考えるとするなら、主日のミサ参加者の数を気にするだけでよいだろうし、そんなに悩むこともないだろう。

四十年ほど前に開かれた第二バチカン公会議は、歴史上、初めて教会が教会自身を見つめ直した公会議であった。その時、教会は自分自身を「神の民」としてとらえ、世界の完成に向けて「旅をする民」と定義づけた。それまで、どちらかといえば、個人と神とのかかわりを重視し、個人の救いを中心とした信仰は、共同体としての互いのかかわり、共同体としての救いを中心とした信仰へと視点が変わった。公会議の終わりころは、わたしは中学生であったが、いろんなことが大きく変わったことを記憶している。それから、教会は公会議の精神に基づいて、さまざまなことが変わってきた。ただ、それが、周知徹底できてないことから、現在にいたって

も、教会によってその有様に違いがあるのは否めない事実である。また、その原因が、司牧にあたる司祭の教会理解の違いにあることも事実である。公会議後、とくに教会の福音宣教の使命が強調されたが、それ以前の司牧においては、信徒の世話、特に秘跡（洗礼・堅信・聖体・ゆるし・病者の塗油・結婚・叙階）を信徒に施すことが重要視されていた。それが、公会議の後も続けられ、一部の司祭たちは、秘跡による司牧と、教会管理を最優先している。

## 3 神父・司祭・牧会者——その真の姿

カトリック教会では、牧会者のことを呼称として神父、役割としては司祭という言葉を使う。キリストが弟子たちの使命として残された役割を考えると、牧者という言葉が適切かもしれない。ただし、真の牧者はキリストであるということを決して忘れてはならないが……。司祭もまた、真の牧者、キリストによって導かれる羊なのである。

神父という呼称は、なんとなく、上の立場を思わせる。司祭という名称は、典礼、儀式を司る者を思わせる。牧者の真の姿はキリストに見いだされるものである。つまり、徹底的に愛し、奉仕する姿である。牧会者は、このキリストの精神に生きるがまず求められているのではなからうか。

それからみると、あまりにも権威主義が目立つこともある。牧会者がすべての権威をもっており、信徒は、ただそれに従うことが求められたり、信徒の主体性が無視、または、軽視

されることもある。何でも最後に決めるのは牧会者となる。しかし教会は、一人ひとり神から呼び集められた共同体。神の前に一人ひとり尊く、平等である。その一人ひとりに聖霊が働いている。その一人ひとりが尊い使命を与えられている。牧会者は、そのような人の集まりである「民」に奉仕するのである。

#### 4 みんなの教会——バリアフリーの教会

バリアフリーは、元来は建築用語であるが、その精神は、教会そのものを表すのに適切な言葉のように思える。バリアフリーとは、障壁がないこと。邪魔になる壁がないことを意味する。キリストこそ、神と人のある障壁（カベ）を取り除いた。神と人の中には、もう何もない。神は人となり、さらには、キリストを通して、人以下の者になったといっている。いいほどまでにへりくだってくださったのである。

今年の聖週間に、キリストの受難を黙想しながら、今までになく、そのことに気づかされた。ミサの中で「主の受難」が朗読された。それを聞きながら、美しい祭服に身をつつみ、祭壇の上、中央に立っている自分の姿が、キリストの姿といふかにかき離れているのかに気づかされた。受難の朗読の後、説教の 때가きたとき、わたしは祭壇から降りた。信徒の前に進み、身をかがめた。さらに、ひざまずき、そして、祭服を着たまま、床に横になった。信徒は、わたしを見下ろした。神は人から見下されるまでに、へりくだってくださったの

である。神と人との距離がなくなった。神は苦しむ人と同じようになり、さらに、同じだけでなく、それ以上に苦しまれた。だからこそ、わたしたち人間の苦しみもわかれる。そのようにして神の愛を表したイエスを神は高く挙げられ、キリストとされたのである。わたしたちは、その受難の姿に神の愛を見、その愛が、神のわたしたちへの愛であることに気づかされる。それゆえに、わたしたちは神を賛美する。教会はそのような人の集まりである。その集まりに奉仕するのが、牧会者である。

#### 5 牧会者の模範は「牧会者」であるキリスト

牧会者の模範はキリストである。羊を牧することをゆだねられた牧会者は、キリストのころをよく理解し、自分自身がキリストによって救われ、癒されたことを忘れずに「民」に奉仕しなければならぬ。キリストの生き方、それは「仕える」ことであつた。イエスは弟子たちの足を洗い、ご自身を聖なる体として与えた。十字架の上では、人々の赦しを父である神に求め、ご自分の血を流しつくされた。イエスの生涯は、人に仕える生涯であつた。「師」である主が、そのようになつたのであるから、弟子もそのようにしなければならぬ。「良い羊飼いのたとえ」を、牧会者は座右の銘とする。イエスは言われた。「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っているのと同じである。わたしは羊の

ために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。」(ヨハネ10・14—17)

## 6 具体的に、どうするか？

牧会者も牧されている。良き牧会者キリストが牧会者の牧会者である。牧会者もキリストによって導かれる。

その牧会者は——まずキリストの声、福音を伝える。キリストの真の姿を伝える。それは、「仕えられるためではなく、仕えるために来られた」キリストの姿である。そして、牧会者自身も、仕えるために、信徒の声を聴く。信徒の声を聴けば、何をしたらいいのかが見えてくる。そして、教会活動のあらゆる場面で、仕えられるためではなく、仕えるために行動するようにこころがける。

聴くこと、声をかけることからすべては始まったように思える。信徒は教会のことを真剣に考えている。ミサの後にお茶がゆっくり飲めるようにしたらどうか、という意見があり、すぐに実行に移された。それから、教会の庭で談笑する姿が見えるようになった。そこから、信徒のいろんな意見や要望、悩みなどが聴けるようになった。主日のミサ参加者も増えてきた。ミサ中は、深い沈黙とともに、明るい歌声が聞こえるようになった。若者や子どもたち中心のミサが月一回行われ

るようになった。ミサの聖書朗読や奉納も、いろいろな人がするようになった。陰になり日なたになって奉仕する信者が増えてきた。掲示板も外向けに整備された。聖堂に木製のベンチが寄付された。だれが寄付したのか未だにわかっていない。高齢者の奉仕グループが生まれた。信者でない人が教会に来るようになった。ステンドグラスのために寄付があり、スペインで活躍する地元の芸術家が無償で作成してくれることになった。教会委員会の性格が変わった。司祭と委員中心に動いていた教会が、信徒中心の教会に変わりつつある。信徒の思いが反映されるようになった。教会委員会は上意下達の機関ではなく、むしろ信徒の思いを吸い上げる機関になった。委員は名誉職のように思われていたが、それは、奉仕職であることに気づいてきた。その活動精神はイエスが示してくださった奉仕の精神である。これらの変化は、すべて聖霊の働きによる。

教会はみんなの教会である。そこにいかなる差別もあってはならない。バリアフリーの共同体である。聖霊は一人ひとりに語りかけ、その思いを示してくださる。牧会者はこの「民」に耳を傾ける。牧会者が、キリストのこころをもって聴き、仕える時、教会は神の望まれる家族に変えられていくのではないだろうか。